

愛知大学人文社会学研究所2015年度活動報告

愛知大学人文社会学研究所は、設立初年度にあたる2015年度の活動として以下を実施した。
(1) 人文社会学研究所体制の確立、(2) 人文社会学研究所機関誌の発行、(3) プロジェクト・研究会の実施、(4) 人文社会学研究所開設記念シンポジウムの開催。各活動の概要は次のとおりである。

(1) 愛知大学人文社会学研究所体制の確立

2015年4月1日付で愛知大学人文社会学研究所規程を制定し、愛知大学人文社会学研究所を設立した。研究所設立にともない、新体制確立のために計画されていた研究用機器備品の整備、研究所 Web サイトの作成、各種規程の整備、各プロジェクト・研究会が必要とする資料の収集およびデータベース等のライセンス取得について、これを実施した。

(2) 愛知大学人文社会学研究所機関誌『文學論叢』の発行

旧文學會による『文學論叢』第152輯(2015.7.31)について、当初の計画どおり、これを発行した(全126頁、論説5編を所収)。

愛知大学人文社会学研究所の機関誌についても、所員を対象に行ったアンケートの結果をふまえ、『文學論叢』の名称を引き継ぐこととした。ただし、判型をB5版に改め、装丁についても一新することとした。また、論文の質の保証と向上を目指し、投稿要領・査読規程を新たに設け、査読制度を導入することとした。以上を経て、愛知大学人文社会学研究所の機関誌として、新たな体制のもとで『文學論叢』第153輯(2016.3.9)を発行した(全188頁、論説7編、研究ノート2編を所収)。

『文學論叢』第152輯および第153輯は、国内360ヶ所、海外20ヶ所の大学、研究機関および図書館に寄贈し、愛知大学の学生にも広く配布した。なお、第152輯は2016年4月1日より、第153輯は2016年10月1日より、愛知大学リポジトリにて公開されている。

(3) プロジェクト・研究会の実施

所員を中心に組織されるプロジェクト・研究会において、① Confucian-Islamic Connection 基礎研究、②「国際英語」教育に関する研究、③ 南方における近代日本青年の足跡・研究、④ 行為としての教養——身体と新教養概念の4研究プロジェクトを遂行するとともに、これらに対して、その研究活動費を助成要領に基づいて助成した。

いずれのプロジェクト・研究会も、2年間(2015年度～2016年度)の研究活動を前提とし

ており、初年度にあたる2015年度は、国内外での資料収集、あるいは国際シンポジウムや国際学会への参加などが、主たる活動となった。最終年度にあたる2016年度には、2015年度の研究活動に基づき議論を深め、成果報告会の開催および成果物の刊行を通して、研究成果を広く社会に発信することが目指される。各プロジェクト・研究会の概要と2015年度の活動は、以下のとおりである。

① Confucian-Islamic Connection 基礎研究

1) 概要：最近の中国における儒家 / 新儒家的思想潮流分析と中国内外のイスラーム主義諸潮流の動向の分析とを接合し、いわゆる《Confucian-Islamic Connection》の思想的基盤を探る。

2) 代表研究者：鈴木規夫（国際コミュニケーション学部）

3) 共同研究者：樫村愛子（文学部）

周 星（国際コミュニケーション学部）

武者小路公秀（国連大学元副学長）

小島康敬（ICU 特任教授）

ニコラス・オヌフ（フロリダ国際大学名誉教授） ※海外協力員

蘇長和（復旦大学教授） ※海外協力員

臧志軍（復旦大学教授） ※海外協力員

単 純（中国政法大学教授） ※海外協力員

張 踐（中国人民大学教授） ※海外協力員

4) 2015年度の活動：

- ・マラン大学（インドネシア）におけるシンポジウムへの参加
- ・ウィラメット大学（アメリカ）におけるオープンフォーラムへの参加

② 「国際英語」教育に関する研究

1) 概要：英語を学ぶ目的がコミュニケーションツールへ変化し、英語を専攻する学生が「国際英語」を学んで、どのように意識が変化するかを調査、分析。他大学の実態を把握、関連国際学会に参加、本学の英語教育に貢献する。

2) 代表研究者：ローラ・リー・クサカ（短期大学部）

3) 共同研究者：サイモン・サナダ（文学部）

ダニエル・デヴォリン（文学部）

4) 2015年度の活動：

- ・国際学会 ELF8（北京にて開催）への参加
- ・ELF8とCIE（現代国際英語）国際英語教育研究会による中間報告会の開催
日時・場所：2015年10月29日 於：豊橋校舎 研究館1回 第1会議室
趣旨：国際英語教育研究会がCIE（文学部欧米言語文化コース現代国際英語専攻）に関する調査内容とELF8(第8回ELF国際学会)のハイライトについて報告する。
報告者：ローラ・リー・クサカ（短期大学部）
サイモン・サナダ（文学部）
ダニエル・デヴォリン（文学部）

③ 南方における近代日本青年の足跡・研究

- 1) 概要：近代日本における「南進論」の対象である台湾・華南・東南アジア等の地域における実際の日本人の動向に関するデータベース構築による基礎資料整備とそれに基づく個別テーマの研究とその成果の教育・社会への還元。
- 2) 代表研究者：塩山正純（国際コミュニケーション学部）
- 3) 共同研究者：加納 寛（国際コミュニケーション学部）
岩田晋典（国際コミュニケーション学部）
須川妙子（短期大学部）
- 4) 2015年度の活動：
 - ・香港および台湾における資料収集
 - ・GISを用いた資料整備ならびに分析

④ 行為としての教養——身体と新教養概念

- 1) 概要：「教養」を、非言語的な身体知を基軸として再定義する試みである。すなわち、教養の内実の変化を、身体＝非言語的知に即して辿りつつ、教養生成の存在論的基盤を明らかにしようとするものである。
- 2) 代表研究者：下野正俊（文学部）
- 3) 共同研究者：木島史雄（現代中国学部）
須川妙子（短期大学部）
山本 昭（文学部）
加島大輔（文学部）
- 4) 2015年度の活動：
 - ・国内の講演会への参加

- ・国内各所における資料収集の実施
- ・『漢語大詞典』光碟繁體單機3.0版の取得

(4) 愛知大学人文社会学研究所開設記念シンポジウム「人文知の再生に向けて」の開催

愛知大学人文社会学研究所開設記念シンポジウム「人文知の再生に向けて」を開催した。本シンポジウムは、実学重視のもと人文社会系の学問が軽視され、ナショナルスティックな言説がマスコミを支配するなかで、学問が本来的に有する批判的精神を取り戻すべく、人文社会学の意義を問い直すことを趣旨として企画された。

当日は、哲学・文学・社会学・歴史学・言語学・心理学の各分野から、本研究所所員6名がパネリストとして登壇し、活発な議論が展開された。また、本シンポジウムの開催にあたっては、新聞社・市民館・高校・大学など380ヶ所へポスター・フライヤーを配布するなど事前広報を行い、一般公開をした結果、きわめて専門性の高い内容にもかかわらず、33名の来場者を得た。本シンポジウムの詳細は、以下のとおりである。

テーマ：人文知の再生に向けて

日時・場所：2015年6月27日 於：豊橋校舎 研究館1階 第1-2会議室

パネリストおよび報告タイトル：

伊東利勝（歴史学）問題提起

下野正俊（哲学）「存在」観の変遷について－西洋的知の根源と大学－

空井伸一（文学）批判の学としての「国文学」

植田剛史（社会学）都市計画における批判的な専門知のあり方を考える

小野賢一（歴史学）人文諸学のなかのヨーロッパ中世史

片岡邦好（言語学）「多様性」盛衰のうねりと言語問題について

関 義正（心理学）「生物学的心理学」が明らかにしてきた「心」の生得的傾向

2016年3月20日には、愛知大学人文社会学研究所開設記念シンポジウム報告書『人文知の再生に向けて』（全256頁、各報告に基づく論考7編を所収）を刊行し、各大学、研究機関および図書館に寄贈した。なお、『人文知の再生に向けて』は、2016年6月1日より、愛知大学リポジトリにて公開されている。